

熊本城復旧 “見せる”工夫に期待

熊本市のシンボルといえば、やっぱり「熊本城」だ。2016(平成28)年の熊本地震で甚大な被害を受けたことは記憶に新しい。大天守・小天守をはじめ国重文の櫓(やぐら)群など多数の建造物が被害を受け、多くの石垣が崩落した。熊本市の復旧基本計画では、20年をかけて地震前の姿に戻す予定。現在も、本丸部分への立ち入りはできない。

ただ、復旧は急ピッチ。本丸に設置された巨大なクレーンが忙しく動いている。5月には大天守を覆っていた天幕上部がはずされ、新しい鯨(しゃちほこ)が載った屋根部分が見えるようになった。こうした復旧の過程を見ることは、なかなかできない。また石垣が崩落したことで、石垣内部の構造まで見られる場所もある。市では城周辺24ヵ所を巡る「復興見学ルート(約60分)」を設定。外国語の表記もある案内板を設置して“復興の様子を見せる”工夫を凝らしている。こうした仕掛けが功を奏してか、城周辺で多くの観光客を見かけるようになった。

実際2017年、熊本城を訪れた観光客は速報値で207万人(地震のあった16年は144万人)。9年ぶりに200万人を突破した。復興関連の大規模イベント参加者なども含めてはいるが、本丸へ入れないのに驚くべき数である。

19年にはラグビーW杯や女子ハンドボール世界選手権が県内で開かれる。この年には天守の外観が復旧し、日曜・祝日限定で天守前広場まで入れるようになる(天守内部に入れるのは21年度の予定)。また同年から翌年にかけては、仮設の見学者通路を設置して平日でも見学可能にする計画だ。長い年月がかかる熊本城復旧。過程を“見せる”工夫は重要になってくるだろう。内外の観光客が何回も足を運んでくれる仕掛けを期待したいが、まずは今の熊本城を見に来ていただきたい。周辺を歩いて回遊する分、城のスケールの大きさ、石垣の圧倒的存在感などを感じてもらえるはずだ。

お城の話だけになってしまったが、散策の後には、馬刺しや辛子蓮根に球磨焼酎の楽しみも。足を伸ばすなら世界文化遺産で注目の天草や阿蘇もある。野菜や果物、水だっておいしい。PR下手の汚名も、くまモンが払拭(ふっしょく)しつつある。ぜひ復興の途上にある熊本の姿を見に来てほしい。

熊本日日新聞社 業務推進局生活情報部 高嶋正博



写真左より、城の周囲24ヵ所に設置された案内板。部材などが回収された「長堀」。復旧が進む天守閣(手前は本丸御殿など)※景観は日々、変わっています